

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00471

研究課題名（和文）『ロランの歌』の電子校訂(C/V7写本)とデータベースの構築

研究課題名（英文）Electronic edition and database of Chanson de Roland (ms. C/V7)

研究代表者

小栗栖 等 (Ogurusu, Hitoshi)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：60283941

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：当初2019年から2024年の5年間の計画であったが、最終年度に基盤研究(B)に移行したため、2023年度が最終年度となったが、それまでに写本閲覧ソフト (Oliphant) や辞書閲覧ソフト (Durendal2, Almace2)、写本校訂用電子ツール (Scriptorium, Escarboncle, RolandCorrespondance)の改良や、新たな電子辞書の作成をおこなった。また、2023年度には、ヴェネツィア (Venezia 7) 写本とシャトルー (Chateauroux) 写本のトランスクリプション（転写）をもとに両者本を詩行単位で校合できるデータベースを作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の大枠となる、『ロランの歌』の全ての写本を校訂するという一大プランの成果としては、2020年と2021年にケンブリッジ写本に関する論文が、『ロマンス語文献誌 (Zeitschrift für Romanische Philologie)』(De Gruyter)に掲載され、刊行された。この19世紀に創刊された、極めて権威ある雑誌上での論文掲載は、私の研究が国際的水準にあることを示す重要な指標である（名古屋リポジトリで公開済み）。また、2022年と2023年に自費出版した刊行本、校訂作業にもなって開発した電子ツール類は順次無料公開し、研究成果を社会に還元している。

研究成果の概要（英文）：The project was originally planned to run for five years, from 2019 to 2024, but due to the transfer to Kiban Kenkyu (B) in 2024, the final year was 2023. During the four years, improvements were made to manuscript reading software (Oliphant), dictionary reading software (Durendal2, Almace2), electronic tools for manuscript revision (Scriptorium, Escarboncle, RolandCorrespondance) and the creation of new electronic dictionaries. In 2023, a database was created to allow line-by-line proofreading of the two manuscripts based on the transcriptions of the Venezia 7 and Chateauroux manuscripts.

研究分野：フランス中世文学

キーワード：武勲詩 テキスト校訂 中世文学 デジタルヒューマニティー

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

『ロランの歌』には、断片を除いて、7種の写本がある。すなわち、オックスフォード(Oxford)本(略号O本)、ヴェネツィア(Venezia)IV写本(V4本)、シャトルー(Châteauroux)写本(C本)、ヴェネツィア(Venezia)VII写本(V7本)、パリ(Paris)写本(P本)、ケンブリッジ(Cambridge)写本(T本)、リヨン(Lyon)写本(L本)である。それらを一望できるような校訂本を作成しようとする試みは、20世紀初頭にさかのぼる。しかし、そうした試みは限定的な成果しかあげることができなかった。すなわち、1900年発行のシュテンゲル(Stengel)の校訂本は、O本の「誤り」を修正すべく、諸写本が提供する異文を多数収録したが、それらの異文は、校訂テキスト内の詩行に対応させるために、断片化されている。したがって、O本以外の写本のテキストを通読することはかなわない。セーグレ(Segre)が1971年に刊行した校訂本にも、大量の異文が収録されているが、O本の仮想祖本と他の写本の仮想祖本の再構築に寄与しない異文はすべて省かれている。各異文は断片化されており、O本以外の写本を通読することは不可能である。一方、フェルスター(Foerster)は、1883年にはC、V7本を、1886年にはP、T、L本を、全詩行にわたって校訂したが、この古い校訂本は、『ロランの歌』諸写本の全貌を提示しようとする姿勢を欠いている以外に、三つの重大な欠点を有している。すなわち、第一に、一部の写本については、図書館職員による筆写にもとづいて校訂が行われたこと。第二に、その校訂テキストでは、句読点や大文字小文字の区別、u-v、i-jの区別などがなく、第三に、各写本のテキストは、通読が困難なやり方で組版されている上に、通しの詩行番号が付されていないこと、である。モルティエ(Mortier)が1940年から44年にかけて刊行した校訂本は、フェルスターの校訂本を再構築し、上記の欠点を解決したうえで、各写本のテキストを通読できるようにしたものである(ただし、V7写本は写本のファクシミリ版である)。しかし、この再編作業においては、残念ながら、ほとんどの場合、写本に立ち返ってのテキストのチェックは行われなかった。のみならず、不適切な句読点や略号解釈、多数の誤植等の問題もあり、校訂テキストの信頼度は著しく低い。そのような状況下において、ダガン(Duggan)をgeneral editorとして、2005年に刊行された*La Chanson de Roland/The Song of Roland: the French Corpus*が、研究者たちに大きな期待を抱かせたのは当然のことであった。しかし、この大著も、学問的要求に十全に応え得るものではなかった。なるほど、書籍としてのフォーマットは、各校訂本間で統一されているが、中身は実のところバラバラで、方法論に統一を欠く状態なのである。たとえば、C本のテキストは写本の読みをそのまま再現したものに過ぎないのに対して、V7本の校訂では、C本とV7本の祖本の再構築が試みられている。一方で、P-T-L本が、(V7本とC本がそうであるように)、共通する祖本をもつにも拘らず、その祖本は再構築されず、各写本のテキストのあるべき姿が、独立して、再建されている。O本にいたっては、校訂者の恣意にまかせた修正が満載されている。しかも、各写本の詩行の対応は、かなりの部分がMortierの労作により明らかになっているにも拘らず、彼らの校訂本では、写本間の対応は詩節単位でしか示されない。固有名索引は写本ごとに分割されており、ある写本の、とある人名が他の写本でどう表記されているかを知る簡単な方法は提供されていない。難解語彙集(glossaire)にいたっては、写本ごとにばらばらなうえに、内容が極端に貧弱である。その後、C写本は、2014年にマージョリー・モファット(Marjorie Moffat)氏、2016年にジャン・シュブルナ(Jean Subrenat)氏によって、新たな校訂本が作成されたが、これらも期待外れと言わざるを得なかった。前者には校訂ミスが続出しており、それを厳しく批判する応募者の書評は権威ある国際専門誌に掲載された。そして、両者に共通する大きな問題は、他の写本との照合のための道具立てを、ほぼ完全に欠いていることである。C写本とV7写本は大変近い関係にあるが、両者の間を行き来するために、大変な苦労を強いられる状況は、V7写本を正確に再現した校訂本が存在しないこととあいまって、Mortier以来、全く改善されていないのである。

2. 研究の目的

1で言及した問題点は、そのまま、本研究課題において、解決すべき問題となる。すなわち、研究代表者がこれまでの校訂において採用したのと同じ基準、方法論でC、V7写本を校訂し、均質なテキスト空間を構築すること、それら各写本を可能な限り、詩行ごとに対応させ、ある写本を通読する際に、他の写本の対応する詩行が即座に確認できるようにすることが、本研究の目的となる。とはいえ、それだけでは不十分である。すでに、見てきた通り、『ロランの歌』諸写本のテキスト校訂は、100年以上におよぶ、長い歴史を持つ。それらの研究史を見渡せるようにしておくことも重要である。各写本の詩行ごとに、過去の校訂者の主張をまとめ、データ化する作業も、これまでと同様に行う。是非とも強調しておきたいのは、本研究課題と類似の試みは、現在、国内外を見渡しても、どこにも存在せず、それゆえ、データベース完成の暁には、必ずや、世界中の中世仏語仏文学研究者に歓迎されるということである。当該データベースは、単に『ロランの歌』作品研究に寄与し得るだけではない。というのも、語彙研究においては、O本以外の、

『ロランの歌』のテキストにも、大きな歴史的価値があるが、研究者が現在手にし得るのは、難解語彙集がまったく、あるいはほとんど備わっていない校訂本が大半である。自在に検索が行え、他の同系列写本や O 本との対比が容易なデータベースが、語彙研究者にどれほどの福音をもたらすかは容易に想像される。同じことは、校訂作業やデータベース構築の途上で開発・公開される電子ツール類にもあてはまる。

3. 研究の方法

フランス最古の叙事詩、『ロランの歌』のシャトルー(Châteauroux)写本、ヴェネツィア(Venise)7 写本を校訂して、データベース化し、オックスフォード(Oxford)本、パリ(Paris)写本、ケンブリッジ(Cambridge)写本、リヨン(Lyon)写本のデータベース(2009-13年、2014-2018年度科研費研究課題)に組み込む。当該データベースでは、各写本内を検索したり、6 写本の対応詩行を自在に行き来できるだけでなく、過去の研究成果をも参照できるようにする(使用言語はフランス語)。校訂作業は、写本を読んで、それをコンピュータの文字で表記し、できあがったテキストを何度も写本と見比べて手直しするという地道なものである。ただし、現代の活字書籍を電子化する作業とは、質的にまったく異なる。写字生の文字は時に乱れ、時ににじみ、時に剥落している。たとえ文字が判別できたとしても、必ずしも、それが理解可能な文を構成してくれるとは限らない。写字生が転写ミスを犯さないとも限らない一方で、写字生の提案するテキストの正誤を判定するのも、時にきわめて難しい作業となる。たった一詩行のために、詳細な語彙研究、文法研究、さらには文化研究が必要になることは、決して稀なことではない。他方で、同系列に属する他の写本、時には他の系列に属する写本、さらには他の作品をも詳細に検討して、はじめて理解される詩行も存在する。したがって、写本の一詩行から、校訂本の一詩行を写し取る過程では、多数の文献を渉猟しなければならず、そこに膨大な時間が注ぎ込まれる。校訂作業とは、いにしへの写字生が残した不確かな証拠から、最も妥当なテキストを割り出すという、再構築の作業であり、単なる転写作業ではありえないのである。さらに、校訂作業に際しては、常に、過去の校訂テキストとの比較検討も必要である。それにより、自分自身の校訂ミス(逆に、過去の研究者のミス)を見つけたり、解釈の多様性を確認することができる。過去の校訂本と我々の校訂テキスト異同は、網羅的にデータベース化されることになるが、こうした作業は、校訂作業と同時進行になる。このようにテキスト校訂に際しては、膨大な作業が必要となるが、Oxford 本校訂時に確立した電子校訂法に基づき、コンピュータを最大限に利用し、電子辞書、写本閲覧ソフト等の様々なツールを維持・開発し、作業の効率化をはかる。作成したデータベース及び電子ツール類(使用言語はフランス語と英語)のうち、著作権の問題がないものは、全て、WEB 上に無料公開する。さらに、関連する論文をフランス語で執筆し、積極的に査読付き欧文雑誌に投稿して、研究内容や成果を世界に発信する。

4. 研究成果

本研究計画は『ロランの歌』のすべての写本をテキスト校訂しデータベース化、刊行本として公開するという壮大なプロジェクトの一部をなす。そのため、他の写本に関する業績もまた、本計画の業績の一部とみなされ得る。本研究計画中にはまず、重要な二本の論文、『Problèmes méthodologiques de 《The Cambridge version》 du Roland éditée par Wolfgang G. van Emden》「ウォルフガング・ヴァン・エムデンにより刊行されたケンブリッジ版『ロランの歌』の方法論上の問題点」(2020年)、《Commentaires sur des vers problématiques du manuscrit de Cambridge du Roland》「ケンブリッジ写本『ロランの歌』の難解詩行に関する注釈」(2021年)が『ロマンス語文献誌 (*Zeitschrift für romanische Philologie*)』に掲載・刊行された。本雑誌は19世紀創刊の定評ある学術誌であり、当然なら厳しい査読が行われる。このような権威ある雑誌に関連論文が掲載されることは、本研究の学術的価値を担保するうえで欠かせない。というのも、本計画の最大の成果としてのデータベースや刊行テキストは、すべての研究者に無料で公開するため、出版社による刊行が望めず、査読がない状態となるほかないからである。本計画で、2022年にはEdition électronique du Roland d'Oxford (2^e édition)『オックスフォード版『ロラン』の電子校訂本』を、2023年にはEdition électronique du Roland de Cambridge『ケンブリッジ版『ロラン』の電子校訂本』を刊行したが、いずれも自費出版(Amazon Kindle, Independently published)とし、前者についてはすでにpdf版を名古屋リポジトリに公開済みあり、後者は2024年10月に公開予定である。

また、『ロランの歌』各写本の校訂作業に際して、開発・維持を行ってきた各種ソフトウェアは多くのユーザーの支持を得ている。具体的にはPDF化された辞書を検索するためのソフトウェア(Almace, Durendal)、PDF書籍閲覧ソフト(Veillatif)、電子索引作成検索ソフト(Halteclere)、写本画像閲覧ソフト(Oliphant)、写本校合ソフト(Joyeuse)などがそれである。これはコンピュータ上で動作するが、最初の三つはiPad上でも動作する。これらのソフトウェアにより、研究者は10巻以上に及ぶ大型辞書を机上、さらには出先でさえも気楽に利用できたり、複数の刊行本の語彙集や注釈を容易に閲覧することができる。また、行番号が付されておらず、大変に検索が難しい写本の画像に、簡単に行番号を付し、電子テキストとリンクして画像を閲覧することもで

きる。いちいち重い辞書を書架から机に運んだり、膨大コレクションのなかから目当ての刊行本を探すのに多くの時間を割いたり、写本画像の上を指さしながら行を数えたり、といった手間を強いられてきた研究者にとって、私の作成した電子ツールが大きな福音となったことは論を俟たない。実際、国内外の研究者からお礼のメールを受け取ることもある。

なお研究代表者の『ロランの歌』やデジタルヒューマニティ関連業績についての言及が見られる海外の論文には次のようなものがある。

Zarifa ECHMOURODOVA, « Termes ethnographiques dans l' épopée Alpomich et dans la Chanson de Roland : les noms des armes et des chevaux », Regards croisés France-Asie centrale : l' enseignement des langues étrangères à l' université, 2021.

Bryan DUFOUR, « Measuring the performance of work integration social enterprises in an evolving policy environment: a comparative study between Denmark and France », Thèse présentée pour obtenir le grade universitaire de docteur en Sciences économiques, Aix Marseille Université, 2019.

Mathilde Regnault, « Annotation et analyse syntaxique de corpus hétérogènes: le cas du français médiéval » HAL Id: tel-04069848 <https://theses.hal.science/tel-04069848>, 2023.

Clara Bringer, « Lemmatisation et annotation des formes verbales du français médiéval », Université de Strasbourg Master 2 de Technologies des Langues, 2019.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Hitoshi Ogurisu	4. 巻 137
2. 論文標題 Commentaires sur des vers problematiques du manuscrit de Cambridge du Roland	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Zeitschrift fur romanische Philologie	6. 最初と最後の頁 1014-1077
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/zrp-2021-0040	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Hitoshi Ogurisu	4. 巻 136
2. 論文標題 Problemes methodologiques de "The Cambridge version" du Roland editee par Wolfgang G. van Emden	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Zeitschrift fur romanische Philologie	6. 最初と最後の頁 952-973
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/zrp-2020-0053	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小栗栖等
2. 発表標題 変異を繰り返すテキストとコンピュータ 『ロランの歌』とヴァレリー 『旧詩帖』
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会中部支部
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 小栗栖等
2. 発表標題 ケンブリッジ写本 『ロランの歌』 のテキストについて
3. 学会等名 中世叙事詩学会日本支部研究発表会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 小栗栖等	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Amazon Independently published	5. 総ページ数 326
3. 書名 古フランス語入門: 11世紀末から15世紀末まで	

1. 著者名 Hitoshi Ogurisu	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Geste Francor 2	5. 総ページ数 592
3. 書名 Edition electronique du Roland d'Oxford : projet Rollant tome 1	

1. 著者名 Hitoshi Ogurisu	4. 発行年 2023年
2. 出版社 Geste Francor 2	5. 総ページ数 762
3. 書名 Edition electronique du Roland de Cambridge : projet Rollant tome 2	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Hruodlandus et Alda http://www.eonet.ne.jp/~ogurisu/
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------